

ソ連政権のかくされた性格を暴露

——ソルジェニチンの獅子吼——

田 村 幸 策

第一次世界大戦にロシアは勇敢に戦ったが中途にして倒れた。しかるにその倒れるや、古いロシアの同一性は失われ、それに代って地球上かつて見ない妖怪が現われた。その怪物はチャーチルによると「民族なき国家であり、祖国なき軍隊であり、神なき宗教であった。この新しいロシアと名乗る政府は、革命によって生れ、テロによって育った。この政府は条約を守ることを否定し、敵国と単独講和を行い、百万のドイツ人捕虜を放って昨日までの同盟国たる英仏両国に最後の攻撃を行わしめた。かれら自身の共産主義社会と非共産主義社会との間には公私ともに誠実も存しなければ、いかなる約束も尊重する必要なしと宣言し、ロシアの負担する債務も否認すれば、ロシアの債権も否認した。戦争の最悪の事態から脱出した古いロシアは引ずり降され、それに代って無名な野獣が支配するに至った。人民は権利も、名誉も、自由も、平和も、パンまでも奪われた。かくして戦勝国の会議にはロシアの議席は失われ、地獄のロシアが存続するのみとなった」とある。

以上は第一次世界大戦の末期に出現したレーニンの共産政権の性格を評価したチャーチルの言葉であるが、チャーチルは更にレーニンをもって「復讐の鬼」だとし、ロシア皇帝暗殺容疑で処刑された実兄の怨みを忘れなかったと説明し、特にレーニンは人間の生命を抹殺したことにおいて、いかなるアジアの征服者、ジングスカン（成吉思汗）

や、バツト(拔都)もレーニンと名声を争いえない、と全世界を驚かしている。チャーチルはまたレーニンをもって「偉大な否定者」だとし、かれは「あらゆるものを否定した。神を否定し、国家も、国王も、倫理道徳も、条約も、借金も、利子も、地代も、幾世紀も伝った法も慣習も、契約も、人間社会の全機構を否定し、最後には自分自身をも否定し、共産主義の最重要分野における失敗を告白し、新経済政策なるものを宣言して個人の私的通商を許した。レーニンは帝国主義者は大砲の餌食を必要とする」と責めているが、共産主義者もその試験場に社会学的実験材料を必要とするではないか」と擲諭し、「レーニンの魂は消え去ったかれの肉体をあざ笑うがごとくその辺を徘徊し、その肉体はモスクワ大衆の好奇心と、レーニン信者とのため、漬物になって、今なお保存されている」と結んでいる。

チャーチルのいう共産主義の「試験場」における実験のモルモットにされた憐むべき無数のロシア人の悲惨極まる実情を、かれ自身の体験と二二七名の証言とを根拠として忠実かつ雄渾に描いたのがソルジュニチンの「收容所列島、一九一八―五六年」なる著書である。ノンフィクションの作品で著者自身はこれを「ロシアの真実な歴史だ」とのべている。しかるにこの著書はソ連人が神聖な絶対者と仰ぎ、特にソ連にとっては神格化されているレーニンその人も、チャーチルの主張するごとく「人殺」しの暴君に外ならないことを実証したもので、ソ連の指導者たちにとってかれらの政権を脅す危険な著書でなければならない。だがかかる勇敢な真理の探求者がソ連自体から出現したことは人類進歩の見地からは、ノーベル賞とは別の基準において、人類自由の歴史を飾るものとして高く評価せざるをえない。帝制ロシアの自由の歴史(実は不自由の歴史)を描いたドストエフスキーやトルストイとともにソルジュニチンの存在はロシア民族の誇りでなければならない。

ソルジュニチンの「收容所列島」にかかげる收容所の「分布図」を一見すると、何人も收容所の所在地が「列島」

どころではなく、「ソ連の全土」を蔽い、全土が一大刑務所と化している悲痛な感を禁じえないのである。殊にかれの著書がソ連の指導者たちに重大な問題を投げかけたわけは、それが「レーニン時代をも含んでいる」ことであって、もしソ連人にかれらが神君と仰ぐレーニンすら冒瀆する書物を国内に許せば、ソ連政権そのものの保持に困難を来すおそれがある。しかしサハロフ博士は「ソ連当局がノーベル賞の作家ソルジュニチンの著書をソ連国内で発売を認めるならば、それはソ連当局の『強さ』を示すことになる。しかし著者を国外に追放した決定はソ連当局の『弱さ』の証拠でなければならぬ。祖国のため全力をささげた人に対する新しい『暴力行為』である」と非難していることも見逃しえない。

ソルジュニチンによると「レーニンは一九一八年一月七日「競争をいかに組織すべきか」と題する論文において、「ロシアの土地からあらゆる害虫を駆除するとの統一目標をかかげ、害虫のうちにすべての階級の敵とともに、「仕事を嫌う労働者を加えている。また一九一八年春までに社会主義の裏切者たちの逮捕が行われ、社会革命党、メンシエビキー、アナキスト、人民社会党の連中を、すべて社会主義の仮面をかぶった者として監獄に投げ込んだが、かれらのその後の運命は誰人も知らされていない」と教えている。レーニンはまた一九一九年九月一五日ゴリキーに「腐ったインテリどものことで苦情を言わないよう忠告している。これはゴリキーがレーニンに対しあるグループの逮捕に抗議したからであった」とのべている。更に「一九二一年六月タンポフ県の数カ村から住民の追い立てが行われた。同県のいたるところに、暴動に参加した農民の家族を収容する有刺鉄線で囲まれたラーゲリーが設けられ、三週間以内に当の暴動参加者たちが、自分の首と引替えに、家族の引取りに現われなければ、家族たちを追放すると声明し、これを実行に移した」ともあり、また「一九二二年春ゲー・ペー・ウー（反革命、怠業、投機を取締る非常委員会）

は「宗教」に干渉を始め、ある婦人が「教会で祈ることは自由にできるが、神様だけに聞えるように祈れとの詩を発表したところ、その婦人は一〇年の刑に処せられた」とも教えている。これらはいずれも正史に現われないエピソードだが、「レーニン時代既に殺戮の行われた」片鱗を知るに足る貴重な資料でなければならぬ。

ソルジュニチンの雄筆はレーニン時代を終えてスターリン時代に進むのであるが、スターリン三〇年(一九二四—五三年)にわたる治世は二〇世紀の世界歴史における最も暗黒悲惨な一面を構成する。ソルジュニチンによると「法学者や刑法史家にして一九三七—三八年に処刑された者の信頼できる統計を示してくれる人がいるかどうか。そんな数字を正しく判断できる特別な記録はどこにもありはしない。将来も決してありえないだろう。一九三七年と一九三八年との二カ年間に、ソ連全土において五〇万人の『政治犯』と四八万人の『常習窃盗犯(窃盗をロシヤ人の性癖と理解するよりも、多くの人民が共産治下で衣食に窮した結果と解すべきである)』が『射殺』されている。これは決して空想の数字ではない。見積りはむしろ低いくらいである。他の計算によると一九三九年一月一日までに一七〇万人が『射殺』されたこともある。一体、収容所には実際何人いたのか、誰人も正確には知らされていない。常時一、二〇〇万人ほどの人間がいたというのが、かなり信頼できる数字のようだ。その半数足らずが実に政治犯であったが、六〇〇万人の政治犯といえば、スウェーデンかギリシヤ一国の総人口に匹敵する」と恐るべき事実を暴露している。

かかる無慈悲な包括的屠殺は全くチャーチルのいう妖怪か無名の野獣でなければ不可能な仕業である。しかもその唯一の目的はロシヤ人の承服しえない共産主義を強制的に押付け無理にこれを保持せんがためのみであったとすれば、レーニンの発見した「プロレタリア民主主義」なるものの本体も、恐怖政治の再現以外のなにものでありえないことは知者を待って学ぶ必要はない。

実は無辜の殺人を大規模に行つたスターリンの罪惡史の一端は、ソルジュニチンに先つこと一八年以前に、スターリンの後継者フルシチョフによつて一九五六年二月の第二〇回ソ連共産党大会の「秘密會議」においてあはかれている。ソルジュニチンの「列島論」の副題に「一九一八—五六年」とあるが、「一九一八年」はレーニン時代を含む意味において重要性あることは既述のごとくであるが、それと同時に「一九五六年」はフルシチョフの秘密演説の結果の一として、ソルジュニチンの他の著作の一部がソ連国内で「発売」を許された記念すべき年でもある。

フルシチョフによるとスターリンは「極端な猜疑心をいだき、病的に疑い深い人物」であつて、『人民の敵』なる危険な理念を思いつき「相手方のイデオロギー上の誤を立証することを自動的に不必要とする道具に使用した。この言葉はなんらかの形でスターリンと意見を異にする者、単に敵対的意図をいだいていると疑われた者、評判の悪い者に対し、あらゆる法規範を破つて最も残酷な弾圧を加えることを可能にした。この言葉は事実いかなる種類のイデオロギー闘争も排除すれば、實際問題に対する他人の見解を知ることと排除する。有罪の唯一の証拠に使用されるものは被告自身の「自白」のみであるが、それは現行法学のあらゆる規範にも違反する。後に審査したところその「自白」なるものは被告に対する「肉体的圧力」を加えて入手したことが判明した。結局「人民の敵」なる方式はかかる個人を肉体的に破壊する目的をもつて特に採用されたものとする。

フルシチョフの秘密演説は一九三五年末キエフ暗殺事件に端を発して巻き起されたスターリンによる肅清の大旋風のうち、革命の元勳たちに対するものは十月革命に反対したジノビーエフとカーメネフを含む第一回裁判のみであつて、第二回と第三回の裁判並にトハチエフスキー元師の「銃殺」を含む軍の大規模な肅清には触れていない。キエフ事件直後の情勢に関してはソルジュニチンの著書に「一九三四—三五年」にレーニングラードの全市民の四分の

一が粛清されたと見積られている。この数字を否定できる者があれば、正確な統計を公けにされたい」と驚くべき事件に対し、極めて簡潔だが雄勁な文字をもって挑戦している。なおキローフはレーニングラードの党書記長の要職にあった有力な人物であった。

フルシチョフ演説によると一九三四年の第一七回党大会選出の党中央委員とその候補との総数一三九名のうち九八名(七〇パーセント)は逮捕銃殺されたのみならず、同大会に出席した一、九六六名の代議員のうち一、一〇八名という過半数を遙かに超越した多数が「反革命」の罪で逮捕された。これらすべては「スターリンによる権力乱用の結果であつて、かれは党の幹部に対する大量テロを開始したのだ」とある。実例としてフルシチョフは党中央委員会政治局候補エイヘが一九三八年四月検事総長の承認なく逮捕され取調の判事が予め準備した「自白の調査書」を「裁判以前」に署名させられたが、それは拷問によって強制されたものであつた。翌年一〇月エイヘがスターリン宛に送つた宣言書に『私は拷問』に耐えずして私自身と他の人たちを告発したがそれは私を拷問にかけたウシヤコフが私の肋骨を折つて、いまだ治療が終つておらず、私に大きな苦痛を与えていることを利用したとある。一九四〇年二月エイヘは裁判において「私の自白書なるものには私の署名(それも強制されたものだ)が以外には、一ト文字も私が書いたものはない。私は一生を通じて信じてきた党の政策の真実を信じながら死んで行く」と声明し、同年二月四日「射殺」されたとある。

フルシチョフは更に射殺された二、三の類似の事件をのべ、かくして「数千の誠実にして無辜の共産主義者が恐るべき捏造事件の結果として、またあらゆる種類の虚偽の自白が受諾された結果として死んで行つた。病的な猜疑心をもつスターリンは、いたるところ、いかなるものにも、敵を発見し、裏切者を発見し、スパイを発見した。無制限な

権力をもつスターリンは偉大な我儘に耽り、相手を精神的にも肉体的にも窒息させ、相手にかれら自身の意思を表現しえない事態をつくり上げる。スターリンが誰かを逮捕せよと言った場合、先づその人に『人民の敵』との信念を受諾さす必要がある。次に調査判事が被逮捕者から自白を入手する唯一の方法は、肉体的方法を適用して拷問を行い、かれを意識不明な状態に追い込み、かれの判断力を奪い、人間としての威厳を取り去ることによるものだ」と、党の最高指導者であり、また重大な責任者でもある者として、初めての公式告白を行っている。

ソルジェニチンの著書はフルシチョフの秘密演説が触れていないスターリンが行った一つの重大な、大量殺人事件に言及している。それはスターリンが集団農場制度を創設するため、地主から土地を取上げることに反対した『富農』を一網打尽に追放した事件である。ソルジェニチンによると「一九二九―三〇年に絶滅の対象になった富農の何百万人もが、囚人の波であった」と冒頭し、「その数は測り知れないほど大きく真直に中継監獄の収容所に向った。ロシアの全歴史を通じこれに比較できるものは存在しない。いわば縫いグルミの強制移住であり、根ダヤシにすることであった。一族郎党全部を根コソギにする遣方をとった。子供まで一人残らず目こぼしのない執念深い追跡であった。これは近代史における最初の経験であった」と恐るべき重大事件の全貌を簡潔に伝えている。

フルシチョフもソルジェニチンもともに言及している事件でスターリンの死によって実現しなかったユデヤ人医師団抹殺未遂事件がある。ソルジェニチンによると「一九五〇年以来ユデヤ人はコスモポリタンとして少しずつ間引かれていた。医師団陰謀事件もそれを理由にデッチ上げられた。スターリンが考えたユデヤ人の大規模な抹殺計画によると、一九五三年三月初め殺人犯医師団が赤の広場で絞首刑にされる手筈を整えた。すると興奮したソ連の愛国者たち(当然党から教唆された者)が押しかけてユデヤ人の抹殺を始めようとする。その時(ここにスターリンの性格が

読みとれる) ソ連政府が介入して民衆の怒りからユデヤ人を寛大にも救い出す。その夜ユデヤ人をモスクワからかれらのため既に用意されている極東とシベリヤにおけるバラックの収容所に移されるという内容であった」とある。

ソルジュニチンの「収容所列島」最初の二部は一九七四年一月二日パリで出版され騒然たる問題を引起したのだが、かれはその翌年二月一二日逮捕される直前その第七部を予定より早くしかもその全文でなく抜粋を発表した。理由は「検事局からしつこく呼出しがあったので、やむなくわが国(ロシア)における法秩序(実は無法状態)の現状に対する私の考えをのべざるをえなくなった。私の著書は一九一八―五六年の期間なので、もはやスターリンはいないから第七部は現在の状態に献げる外ない」と前提し、要旨次のごとくのべている。

「ソ連の法は強力でつかみどころがなく、地球上における他のいかなるものとも異なっている」と冒頭し、「先づローマ法では法の『遡及力』を認めていないが、ソ連ではこれを認めている。また古い法格言に『事後立法は許さない』とあるが、ソ連ではこれが許されている(註 アメリカ憲法では明文をにかけて禁止している)。次は『偽証』であるがソ連の法は偽証が道徳上の罪たることを完全に忘れ一般に偽証が刑法上の犯罪たることすら考えていない。ソ連には無数の偽証者が大繁昌で赫々たる日光に俗しながらぬくぬくと老後を楽しんでいる。ソ連こそすべての歴史を通じてまた全世界において、偽証を思うままにさせる唯一の国である。それでもなおソ連の法は、人殺しの裁判官、人殺しの検察官を処罰しない。かれらは多年立派に職務を勤め、高貴に老後を暮している」、と偽証問題を巧妙に揶揄している。

この偽証問題、すなわちウソつき問題こそ、ロシア人の民族的患疾であって、ソルジュニチンは国外追放の直前、党の機関紙プラウダの攻撃に対し「プラウダ紙は、著者を革命的勤労者や、農民を絞首刑にした人たちの眼で見えてい

る、とウソをついている。とんでもない話だ。私は内務人民委員部(N・K・B・D)に殺され苦しめられた人たちの眼から見ているのだ」と反駁し、またドイツ放送により「列島論」を批判したブラウダ紙に対し「それだからこそ、かれらはいつも簡単にウソをつき私の著書にヒトラー一味は奴隸化された人たちに親切であったとか、スターリングラードの戦勝は囚人部隊がもたらしたと書かれているかのような、好き勝手なウソをついているのだ。それはみなウソだ。ブラウダ紙の同志たちよ、どうか正確な内容を引用してほしい」とのべ、またタス通信に対し「タスがいかにかつて触れたい。私の著書にソ連人民は悪魔の化身だとか、ロシア人の魂の神髄は一片のパンのため、自分の父や母を売渡そうとするにあると書かれている、と同紙はのべている。どのページか言ってみよ。このウソつきめ」ときめつけている。収容所列島第四部が出版されたらその第一章の終りに私は歴史のうちのあらゆる革命にウソのあることを理解しているとの表現をあなた方は発見する。この判断はロシア人たちに対するものではなく、ソ連の権力に対するものである。それは永劫の恐怖、秘密と疑惑、精神の衰え、生存形態としてのウソ、と言った各節の表題をもつ第四章に出ている」と付言し、更に右の文学新聞は「世界の反動勢力が緊張緩和をブチ壊すため収容所列島の出版時期を選んだと非難しているが、その時期は今日の世界における主要な反動勢力であるソ連の秘密警察(KGB)が私の原稿を押収せんとする熱意によって選ばれたものだ」ときめつけ、急に発表することになった第七部の抜粋に立戻ってその結論をのべれば「取調の対象または裁判所の調査の対象が国家の利益、共産党イデオロギー、高位の人物の個人的利益または静寧を侵害しない事件においてのみ裁判所の役員はどこからも誰からも訓令をうけず、澄んだ良心をもって事件そのものの理非曲直によって判決する特権を行使できる。その他のすべての事件、すなわち民事および刑事の庄

倒的多数の事件は集団農場または村会の議長、商店の監督官、工場長、団地の支配人、区長、警察署長、主任医師、または先任経済学者、各省の長官、政府機関、特別の保安部と人事部、党機関の地域または地区の書記などの重要利益に触れるすべての事件に対しては慎重な個人的訓令に基き判決審理以前に舞台裏で現実には決定されている。それとも知らない哀れな男たちは正義の血を胸にたぎらせ言うべき合理的主張を準備して居眠りする判事の前にふるえながらそれを展開する。なんぞ知らん、かれらに対する判決はとくに決定済であって、どんなにその不正を怒ってもその最悪にして自分勝手な決定を是正する上訴の途もなければ、時間の制限も方法もない。ただあるものは壁のみであって、しかもその壁はウソのモルタルで固められている。この第七章は『今日の法』と題されているが、本当は『存在しない法』と題すべきであった。同じ不信の秘密と同じ不正義の霧とが私どもを取巻いている。市の吐き出す煙よりも濃い煙が私どもの市の上のしかかっている。強力な国家が鉄のタガで締めつけながら、建国五〇年をすぎたなお高く聳えている。タガはたしかにあるが、それは法のタガではない」と結んでいる。「収容所列島」によるとソ連は帝制ロシア時代と比較して逮捕と処刑の量において一、〇〇〇対一という多数に達し、人間の抹殺においてヒトラーを凌いでいる。

ソ連人がウソをつくことに關してはソ連研究の世界的権威者の一人たるアメリカのジョージ・ケナン (駐ソ大使の閔歴者) によると、ソ連の指導者たちは六〇年前政権を獲得した当初から終始一貫政策上の意識的武器として、ウソをつくことに異常な天才を発揮してきた。客観的真理の存在とその価値とを否認し、苟も共產主義の目的に役立つ場合、ウソを真理と同様に重宝なものと公言して憚らない。ウソをつくことをもって他人を欺き他人の善良性を利用する手段に使うのみでなく、自己を慰め自己を力づける道具にすら使っている。自己に都合の悪い真理よりも都合の善

いウソを基礎として戦闘的政治運動を展開する。それを決して悪いこととは信じていない。真理を愛好しないクセがついているため、本当に自分が信じていることと、そう言った方が都合のよいこととの区別がかれらの心理から去ってしまった。故にソ連の指導者たちの行う声明とか演説とか公文に接した場合、かれらの胆の底にあってかれらが本気で考えていると解釈される下部構造を相手にすればよいのか。それともかれらが工夫して故意にデッチ上げたウソの上部構造を相手にすればよいのか全然見当がつかない。ともかくソ連がデタラメを並べたり歪曲した報道を流した場合、うるさいことではあるが、必ずこれに応答するのが賢明である。文化の高い西ヨーロッパでは同じことを繰返すことを好まないが、真理は真理だからというだけではウソ偽りと闘って勝利をうることは望めない。自由世界もソ連と同様に熱心かつ執拗に真理を宣伝しなければならない。世界はソ連の職業的宣伝機関のみならずソ連政府の幹部要人たちから三歳の童子も信じえないような明白なデタラメとか世間周知の事実と全然矛盾する幼稚な意見を聞かされることに慣れている。特に外交政策に関するソ連政府の声明には歴史上の記録を鉄面皮に歪曲したものを絶えず発見する。その適例は朝鮮戦争の起因(南鮮から攻撃を始めたとの主張)、ハンガリーの反ソ反共革命に対するソ連の態度(帝国主義者の干渉との主張)がそれである。殊にまたソ連の指導者たちは政権を掌握した当初から平和的共存をソ連外交の基本方針としてきたと主張するが、「これほどロシア革命の本当の歴史を尊重せず、かれら自身の戦術的便宜のために、歴史を歪曲することはありえない。こんな途方もない愚かな歪曲を地下のレーニンが知ったならば、なんと言うであろう」かと説明している。

ケナンと同様に駐ソ大使としてソ連政府と交渉の体験をもつ英国のウィリアム・ヘイターも、ソ連外交に有利な点の一としてソ連の外交官たちが真理を重んぜず論理の一貫性を尊ぶ念を全然欠いていることをあげている。ヘイター

によると、「おそらく大抵の人はちょっとしたウソをつくことはありうるが、ソ連の官吏のように絶えず思いう存分ウソをつく者は始んどない。一部分は共産革命以前からロシアに存在する民族的特性であるが、一部分は共産革命とそれ以後における理論の産物である。レーニンの書いたものにはブルジョアに対抗する武器として人をダマスことを正当化する文献が多数存在する。もちろん資本主義国の外交官もウソをつくことはあるが、それはかれらが自己の真意を見破られたくないからである。しかるにソ連の外交官はかれ以外のすべての人は、それがウソであることを知っているとかれ自身知りながらウソをつくのである。しかしかれらはいくらウソをついても、またいくら論理の不一致があっても、議会で質問される心配もなければ新聞であばかれる懸念もない。これらすべてのことはソ連外交官にとって交渉の相手方または反対者の評判を汚す上に極めて役立つ」と書き残している。

更にジョシ・ケナンによると、現在のソ連政権の性格は「昔からのロシア歴史の暗黒面の遺産と、一九世紀の偉大なニセ科学マルクス主義との結婚から生れた奇形児たることである。その暗黒面の遺産の一はロシア人が外部の世界に対し高度な敵対心と猜疑心とをもち、外国人との親交または接触をおそれ、思想的に排他性の傾向の強いことであり、遺産の二は、ロシアの外交官の外交技術と習性とが、一五、一六世紀に流行した相手をダマシ、権謀術数を弄する古風な遣方を改めないことであり、遺産の三はロシアの対外政策が絶えず権力と領土とを拡張せんとする不動の傾向をもち、特にその膨張が経済的にも軍事的にも、またロシア全体にとっても、必要と認めがたい膨張を勝手な抽象的理由をつけて行うことである。しかも、そんな遺産の重荷の上に共産革命によるイデオロギーの上部構造が押付けられたことが、ソ連と他の大国との真の平和的関係を、事実上、不可能にするのが当代の悲劇を生んでいる。

それはソ連の指導者たちがマルクス・レーニン主義に基き、ソ連以外の大国における社会的および政治的制度(註

資本主義とそれを基礎とする諸制度は、永久性をもたないものとの信念をいただき、かかる制度は早期に不名誉な死滅を遂げるものと信じ、かかる制度の下に繁栄している自由世界の人たちに尽きせぬ非難と悪口とをあぶせ、かかる制度と闘い、その不可避的な死滅を早めることを責務としている。殊にかれらはブルジョアの民主主義をゴマカシものだと罵り、過去二千年間、偉大な諸民族が達成したすべての政治的経験と進化とは、政治的現実の理解に対する指針としては無価値なものだと放言し、それに代わるか、または対立するものとして、恥知らずにも、クレムリンの少教の指導者たちの判断をもっている。大國ソ連の責任ある指導者たちが、かかる態度をとることは、全く国際関係の基礎を否認するに均しいのであって、自己の民族的独立を保持せんとする諸國とソ連との間に、秩序ある平和的關係を継続することと両立しない」と教えている。

引用資料

Alexander Solzhenitsyn, "The Gulag Archipelago, 1918—1956," in two volumes by Harper & Row, Publishers, New York and London.